コメディリック第４回「この振る舞いを見ろ」

「平穏の部屋～振る舞いの館・エピソード３～」

登場人物

白石　　シロスコフ

リノ　　テオ・ポー

1.　振る舞いの館・平穏の部屋・昼

モニター・「平穏の部屋」

［SE・ナレ］

ナレ　「ここは『平穏の部屋』偽りの平穏を捨てることができた者のみが部屋を出ることを許される」

モニター・オフ

※白石、板付き

【L・明転】

部屋に一人座っている白石

※リノ、登場

リノ　「（紅茶を持って）はい」

白石　「ありがとう（紅茶をとにかく飲み干す）」

リノ　「何か少し肩張ってるよー？」

白石　「え、そうかな？」

リノ　「強い？弱い？」

白石　「いや…え…」

リノ　「どっち？（笑）」

白石　「もう少し強めでもいいよ」

リノ　「偉そうだなーやってもらってる分際でー（笑）」

白石　「あ…ごめん！あ、もう大丈夫だよ」

リノ　「気持ちよかった？」

白石　「うん。気持ちよかった」

リノ　「はい、１００万円です」

白石　「お金取んのー？」

リノ　「じゃあ、笑顔で払って。１００万円分、笑顔で。笑って」

白石　「（にっこり笑う）」

リノ　「残り１０１万円です！」

白石　「マイナス１万円！？」

リノ　「ふふ。冗談だよ。大好きだよ。シロ君の笑顔」

白石　「え、ほんと？（にやにやする）」

リノ　「１０２万円です！」

白石　「ダメだどんどん増えちゃう！」

リノ　「えへへー。あ！（鼻くんくん）ね、鼻くんくんしてみて？」

白石　「え？…あ、バターの匂いする」

リノ「クッキーが焼きあがったみたい！」
白石「え、そんなんあるの？」
リノ「あるよ。できる女でしょ？」
白石「…（言わない）」
リノ「言えよ！（こちょこちょ）」
白石「ごめん！出来る女！出来る女です！」
リノ「適当に言うんならホッチキスで口閉じちゃうぞ～」
白石「やめてよ～」
リノ「その後キスしちゃうぞ～」
白石「やって～」
リノ「えへへ～お婆ちゃんに教えてもらったクッキーなんだー。紅茶とすごい合んだよ！」
白石「あ…もう紅茶飲んじゃった」
リノ「えー…もう飲んじゃったの？」
白石「うん」
リノ「もしかして…世界紅茶早飲み大会のチャンピオンの方ですか？」
白石「えっと…はい」
リノ「そんな大会無いだろ！（白石をこちょこちょ）」
白石「なんで！そっちから言ってきたんでしょ！」
リノ「ふふふ。紅茶も入れ直すね」
白石「ありがとう」
※リノ、はける
白石「…幸せ！なにこの幸せ！彼女がいる生活ってこんなにすごいの！？はは！やべー！満たされる！満たされる…満たされる！はーあ！はー！」
間
白石「…齋藤達、大丈夫かな？大丈夫っしょ。大丈夫か！いいか！俺はこのままここで！」
※リノ、登場
リノ「我はお前の中の悪魔である」
白石「今度は何が始まったんだー？」
リノ「クッキーを食べたいか？」
白石「食べたいです」
リノ「ではクッキーを食べればいい。…私はあなたの中の天使」
白石「あ、天使も来たー」
リノ「クッキーを食べたいの？」

白石「はい、食べたいです」
リノ「じゃあ、食べればいい」
白石「いや、食べていいんかい！どっちでもいいんかい！」
リノ「ふふふ。あ、でも待って！紅茶と一緒が美味しいから待って」
白石「えー今すぐ食べたいよー」
リノ「（後ろから抱きしめて）待てますか？」
白石「待て…ます！」

※リノ、はける

白石「…おっぱい！背中におっぱい当たった！なんて日だ！なんて日だー！…お背中に・おっぱい当たり・ウフフフ、はー幸せだーこの平穏、これが現実だったらなー…そうだよな…これ現実じゃないんだよな…現実の世界にはこんなデブの俺を後ろから抱きしめてくれる彼女なんかいないんだよな…」

※リノ、登場

リノ「…どうした？」
白石「あ、いや、その」
リノ「大丈夫？」
白石「いや、その、現実にはリノちゃんみたいな彼女、俺にはいないんだよなーって思って」
リノ「ずっとここにいればこれが現実だよ？だからそんな落ち込む必要ないの」
白石「そっか…そうだよね。そうだよね！」
リノ「そうだよ！逃避した先が現実なの。何も悩まなくていいの。ほらシロ君、クッキー美味しいよ」
白石「（食べて）本当だ！美味しい！」
リノ「でしょ？」
白石「お婆ちゃんすごいね！」
リノ「私って言えよ！（白石をこちょこちょ）」
白石「やめて！弱いんだから！」
リノ「でも幸せに感じてんだろ！」
白石「はい！幸せです！」
リノ「私も幸せー」
白石「いやー本当にすごいな。俺にも幸せ感じる器官がまだあったんだな」
リノ「何変なこと言ってんの」
白石「クッキーに変な薬とか入れてない？」

リノ「馬鹿じゃないの（笑）」
白石「いやー…甘い時間に甘いモノ…甘いってすげー…そういや、吉田も甘いモノ好きだったな」
リノ「そうなんだ」
白石「甘いモノ与えると黙るんだよね」
リノ「動物みたいだね」
白石「動物みたいなのは齋藤だな。落ち着きなくて動物みたいにずっと動いてる」
リノ「ふーん…」
白石「高木は自分が正論だって、なると、ぺちゃくちゃぺちゃくちゃうるせーし…もう本当に動物園だよ…あいつら大丈夫かな？」
リノ「心配？」
白石「そうだねー…」
リノ「忘れよう。心配は身体によくないよ」
白石「…俺行くわ」
リノ「…行くの？」
白石「うん。心配だから…行く」
リノ「そっか。それでこそ男だ！」
白石「うん！ありがとう！」

行こうとする白石をリノが止める

リノ「待って！…私を置いてかないで…」
白石「じゃあ、一緒に」
リノ「一緒には行けない。このままふたりでいよう？」
白石「…確かにそれは幸せなことかもしれない…でも、やっぱりここにいるわけにはいかない。俺は現実逃避してここにいる。逃げた先の現実がここなら。俺はここからまた逃げて、ちゃんとした現実を手に入れる…リノちゃん、ありがとう」
リノ「…デブ」
白石「え？」
リノ「デブ…デブ。デブ。デブ。デブ。デブ。デブ。デブ！」
白石「うわあああああ！」

泣いて走り去る白石

※白石、はける

【L：暗転】

―了―